

埼玉スタジアム2002メインピッチ芝張替芝種選定委員会
第二回会議 議事録

情報提供（１）（２）（３）における主な議論

- 日本にＪリーグができてほぼ 30 年経つが、当時芝生に課せられた条件は 3 つある。一年中緑で、平坦で凸凹がなく、排水がよいという 3 つの条件がベースとなっていた。現在でもこの条件は変わっていないが、それぞれの見方が変わってきている。常緑についてはどの程度であればよいのか、水はけについてはゲリラ豪雨に対応できるのか、といった点も焦点となっている。
- 2002 年以降言われてきたのが、それらの条件は芝生の品質そのものに関する条件であり、選手目線がないということである。いくらよい状態で緑が大変素晴らしく、水もあまり溜まらず、平坦性もあったとしても、選手のプレーイングクオリティとは別問題であると、ここ数年問われるようになってきている。中には、多少色が薄くても、あるいは所々傷んでいても、若干凸凹していてもプレーしやすいスタジアムもある。それらを総合的に見て、何がよいかを判断していかなければならない。
- 芝種の選定に関しては気候の影響がある。例えば暖地型芝であるバミューダグラスを北海道で採用するのは無理である。マイナス 10℃の日が続いて、土壤が凍結するようになるところに、暖地型芝を選択したら冬には確実に死んでしまう。Ｊリーグの設立当時はそうしたことにあまり目がいかなかった。また、Ｊリーグではクラブライセンス制度の導入にあわせスタジアム本体への屋根付きを推奨している。それによる日影の発生によって、バランスをどのように取るかが重要となってきている。一方、ヒーティング技術とクーリング技術が出てきたことによって寒地型芝を一年中保ちやすくもなっている。これらの状況を踏まえ、選手目線をどのように入れていくかが非常に大きな要素であると思う。
- 土壌・育苗条件の異なる複数の芝種をスタジアムメインピッチ内の同一の場所で実験しているが、環境への適応性を見るにはよいのではないか。
- 現在行っている試験について、越夏性試験については、当初 7 月、8 月、9 月に実施予定であったが、10 月以降も引き続き実施した方がよい。

議事（１）（２）における主な議論

- 一部試験のデータが出ていないので、データが全てそろった段階でもう一度示した方がよりはっきりするのではないかと思う。
- 12 月から 1 月に予定している第三回会議の前に、もう一度試験結果を示す会議を開催する。

- 実験中の芝が枯れてしまっても、張り替えてしまっても意味がない。そのままでもいいのではないだろうか。見た目が悪くなったときは、着色するなどすればよいと思う。
- オーバーシードは行わないで進めることにする。

その他

- 選手の見線やプレーのしやすさを一番に考えたい。プレーのしやすさと、綺麗かどうかは別のところにある。
- 浦和レッズの成績が悪くなることによって、集客にも影響し県の収入が減り、それに付随して電車に乗らないなど交通機関にも影響が出てくるのではないか。
- 主体として使うのはホームスタジアムである浦和レッズの選手である。浦和レッズがやりやすいかどうかを第一に考えるべきではないか。なお世界的に見れば、サッカーのホームスタジアムは、ホームチームが試合に勝てる一助として水を撒いたり砂を撒いたり、刈り込みの長さを調整したりといった工夫をしている。ひとつでもホームチームがストレスを感じることのないような環境を提供してあげるといった観点のもと、判断できればと考えている。
- 今のJリーグは全部で60近く登録があるが、近年は、チームのためにスタジアムに対して何ができるかということを中心に考えるようになってきており、大きな変化であると思う。

以上